

代表理事講演

演題名	「地域包括ケア」構築・推進における日本在宅医学会の役割
-----	-----------------------------

講演概要

高齢化社会の医療・福祉・生活を地域で守る新たな方式作りが推進されている。地域で「生活し、治し、支え、看取る」には「全員参加」で各機能が受益者にとって、有効かつ効率的で経済性にも配慮して回転する事が求められる。全体の指導者として医療者の役割は大きく全員参加で取り組む体制が不可欠であり、「かかりつけ機能に在宅医療は含まれ原則全員参加体制」が推進されている。面展開が進む際、重要なのは「質」の担保であり、受益者にとってはもちろん、医療従事者にとっても「安心」「安全」が担保されねばならない。試みとして拠点事業で「在宅療養支援アセスメント方式」が検討され、有効に機能しており、医療者の全員参加促進の面からも「不可欠な機能」であると考えている。同時に急性病変発症時の入院受け入れにも有効に機能している。また、在宅医療は従来の臓器別医療と異なり、有効な臨床研究でのエビデンスが極めて少ないので、同意の得られた症例について、「アセスメント」時のデータを集積し、データベース構築の基盤を作る事は重要な課題であり、当学会としても積極的に取り組んで行きたい。

また、「支える医療はあるのか」との疑問も投げかけられているがこの問題こそ重要な課題であり、「高齢者や障害者の脆弱性に対する治療・是正こそ支える医療である。脆弱性に関する基礎研究は著しく進展しており、ニッチ機構を含む複雑な制御系の解明が進んでおり、その成果の応用は在宅医療での「支える機能」を強化し、幾つかの脆弱性の進展を抑止する「成功体験」に繋がっている。多忙な臨床の中、走りながらではあるが、基礎の成果を臨床応用の可能性に翻訳し、臨床応用での成果を基礎に返す努力が必要であり、この臨床での Crunching (噛み砕き) 機能こそ「支える医療の基礎から在宅医療までの循環を作り上げる重要な機能」であり、「脆弱性」解明の未来を作るものと確信している。在宅医療を含む地域包括ケアに取り組む以上、「科学」として取り組む基盤整備が必須である。他の臓器別医療などの分野は長い歴史の中、莫大な研究成果に支えられ、今日の大きな成果に繋がっている。在宅医療を含む「地域包括ケア」でも、例外ではなく、臨床や福祉サービスのみでは、「負のスパイラル」は永遠に解決に至らない。「基礎科学から臨床・社会科学への学問体系の構築」が必須である。このような考えに基づいて本学会では「専門医」の養成を始めている。知識や臨床力の向上は基より、基礎科学の理解や臨床での応用、Crunching 機能やその発信、さらに社会科学的視野を広げ、地域を作り替える能力を育成するため、「ポートフォリオ学習と未来への取り組み」についても評価項目に加え、地域社会を作り替える能力をも有する「日本在宅医学会認定専門医」を認定し、この分野の指導者として力を発揮するものと期待している。